

## プロダクトマネージャーが求めるアジャイル開発における ソフトウェアテストのあり方と生産性向上への取り組み

坂東 壘  
株式会社リクルートライフスタイル  
rui\_bando@r.recruit.co.jp

羽鳥 温子  
株式会社 ProVision  
a-hatori@pro-vision.jp

### 要旨

大規模なサービスを過去 10 年以上にわたりウォーターフォールでプロダクト開発を進めていた我々の現場において、生産性の向上を目的として開発体制の一部でアジャイル開発を採用し、リーンアプローチを続けていた。しかし、その中でも小さいウォーターフォールのような体系は残ることが多く、プロダクトマネージャーから始まり、エンジニア、QA の各メンバー同士の役割も大きく変化することはなかったため、結果として生産性向上と逆効果となる可能性さえあった。

そこで、これまでチーム内での役割が専門スキルごとに明確に分担されていた部分に着目し、QA は固定化されたタイムボックスで動くのではなく、コミュニケーションをとりつつ全体の進捗に応じて緩やかな連携を行うことで、「生産性の向上」を図った。企画段階からプロダクトマネージャーと連携し、仕様の理解やフィードバックなど上流工程での品質の担保などへの取り組みを進めていた。このような取り組みの結果、役割の変化により、QA メンバーの意識の変化に繋がり、テストフェーズの効率化により、企画・仕様の手戻りの防止にも繋がった。それだけではなく、プロジェクトにおける「テスト」だけという役割で、プロジェクトへ関われきれない想いもあった中で、案件に上流工程から関わる中、「プロダクト」における「品質意識」の向上にも繋がった。

しかし、「品質への意識」改善はされたものの「生産性」をいう観点ではチームとして期待するような改善が見られず、チームとしての課題を改めて見直す必要がでてきた。これまでの取り組みでは、主にシフトレフトを中心としたアプローチにおいて、QA メンバーの企画・仕様部分への染み出しが多く、実装・テスト部分での QA メンバーの役割については従来どおりであった。

今回、新たなチーム作りにおいては、チームに残る課題を整理する中で、生産性向上を目指すために“QA スキーム”における「品質」と「テスト」の違いに焦点を当てた。そして、課題をチーム内で整理する中で出てきた「不具

合の増加による生産性の未改善」「プロダクトに対する品質意識のズレ」という我々の課題に向き合うことで、チームが目指す生産性の向上を実現させることを目的とした。

我々は、品質を担保する(ソフトウェアテスト)一連の工程を“QA スキーム”と定義し、従来の“QA スキーム”では、「品質」の担保が QA メンバーにおけるテストのみに依存されていた。その中で、「品質」は QA メンバーがリードするものではあるが、QA メンバーのみが担保するものではないという考えからチーム全体で「品質担保」を行いそれぞれが新たな役割を担う“QA スキーム”を再定義した。これまで置き去りにされていた実装フェーズ以降の“QA スキーム”の見直し、「テスト」におけるチームの関わり方の再考、そして「品質」と「テスト」の違いを明確にすることで、改めて生産性へのアプローチを見直した。

結果、「品質」を QA メンバーの「テスト」で担保していたスキームからチームでの「品質」の担保に取り組むことで、チームの意識自体の変化にも繋がった。サイロ化された QA 意識から脱却することにより、チームとして「品質担保」を行った。その取り組みにより、昨対比による不具合削減にも繋がり、手戻り現象に加え、不具合見逃し等のリスクも軽減されたことで、当初求めていた「生産性の向上」が少しずつ効果として現れてきている。

本発表では、以上の取り組みの中でソフトウェアテストの中心を担う QA メンバーの役割をどのように再定義したのか、チームメンバーと新たな取り組みに対してデメリットやリスクを会話する中で、生産性向上に向けて最適な解を出せるように取り組んだ事例を紹介する。